

塗籠本伊勢物語に関する一考察：定家本との対校を ととして

山口, 康子

<https://doi.org/10.15017/12218>

出版情報：語文研究. 27, pp.44-57, 1969-06-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

塗籠本伊勢物語に関する一考察

— 定家本との対校をとおして —

山 口 康 子

伊勢物語は、古くから諸家に論があるとおり、又、片桐洋一氏がその高著「伊勢物語の研究」において文献学的方法をもつて詳述されたとおり、おそらくは、その原型は現存諸本のいずれにも似ず、東下り、二条后、惟喬親王、齋宮などに関するそれぞれ独立した歌語りを中核として、おゝよそ古今集成立前後から、後撰集成立前後ぐらゐの期間に、不斷に成長、増益をくりかえして現存諸本の形になったものであらう。定家の書写本があらわれてからは、定家の權威も力あつてか、定家本以外の写本は少くなり、現存諸本もその大半は一二五段、二〇九首を有する定家本系統のものである。かかる事情が判明するにつれて、近年の伊勢物語研究は、諸伝本の系統樹立および定家の手の加わっていない原型伊勢物語の追求に力点がおかれたかと思われる。

昭和九年、池田龜鑑博士の「伊勢物語に就きての研究」が出版されるや、再び、池田博士の權威および研究の便もあつて、その「校本篇」の底本に使用された天福本系統、三条西家旧蔵本、伝定家筆本が、あたかも代表的な伊勢物語の本文の如く一

般に通用しているが、それにしても、現存完本のうちもっとも章段数、歌数の少ない一一五段、一九八首の塗籠本系統の諸本は、定家本と大中に本文のちがう伝本としてその価値を認められてきた。現存塗籠本系統諸本の祖本、本間美術館蔵の民部卿局筆本の価値について、南波浩氏は「定家の爪跡を経ない鎌倉初期以前の姿を示す」と考えておられる。定家本系統の諸本が有する一二五章段よりも章段数の多い、いわゆる広本系の諸本は、巻末に小式部内侍本、皇太后宮越後本などにみられる独特な章段を、補つたために多くなっているもので、巻末増補を行なっていないものと姿は、むしろ一二五段よりも小さい。勿論、一二五段本であっても増補が行なわれたことは疑いないが、形としては、初冠から終焉までの一代記的な体裁を保っている。

一体、同一物語の伝本がきわだつて異なっているという事情はどのように説明されるべきであらうか。伊勢物語が現存諸本の形に成長するまでにくりかえしたと考えられる不斷の増益を考えれば、異本が生じるのも当然だといえるが、しかし、異なっているといつて実際にどれほどの相違があるのであらうか。

伝本の系統樹立のために共通異文、独自異文を用いる方法とは別に、諸本間の異同の全体的な相違の実態を把握することが、重要なのではないかと思われる。

今、初冠本のうちで明確な増補を除けばもつとも章段数の多い定家本ともつとも少ない塗籠本との異同の実態を把握することにより、主として塗籠本の成立に関する推論を試み、塗籠本本文の特徴を見きわめたい。底本として、定家本は天福二年書写の三条西家旧蔵本、伝定家筆本（池田龜鑑博士翻刻本）を、塗籠本は本間美術館蔵、民部卿局筆本（福井貞助氏翻刻本）を用いる。両本の異同を大小を問わずすべて抽出し、整理してみる。

一 章段序について

初冠に始まり終焉に終る章段配列の大よそはかわらず、その中で、①塗籠本が、天福本の26 32 39 46 55 67 77 94 101 116 117 段の十一章段を欠き、②天福本にはない一章段（伊勢物語に就きての研究、校本篇のB）を天福本6段の次に加える。これらの十二章段を除き、両本に共通する一一四章段の異同を検討する。共有する章段で歌数のちがうのは、天福本でいって9 36 111 121の四章段である。9 36段は塗籠本が一首多く、111 121段は一首少ない。いずれも段末の一首の出入りである。又、共有する章段で、章段の統合、分離のあるものは、③天福本8段9段を塗籠本では合して一段とし、最後に一首を付加していること、④天福本45段が和歌二首を続けて記しているのに対し、塗籠本では一首ずつに分け塗籠本の41段42段を構成していること、⑤天福本59段を、塗籠本では天福本125段と合して一段としていること、⑥天

福本82段が、塗籠本では77段78段の二段に分けられていること、の四点である。又、段序が異なっているのは、⑦天福本115段が塗籠本16段として天福本15段の次に位置していること、⑧天福本72段が塗籠本では、天福本75段の次に置かれていること、⑨天福本114段が、塗籠本76段として、天福本81段の次に置かれていること、⑩天福本88段が、塗籠本では末尾近く、天福本119段の次に置かれていること、⑪天福本106 107 108の三段が、102 103 104 105の四段と、それぞれそのままの順序で塗籠本においては位置をかえていること、の五点である。

これらの諸点については、後述の二点をのぞき、塗籠本の章段序に、類聚的な意識が働いていることのあらわれと認められる。内容的に関連のある類似の章段を集めて全体的な一貫性、合理性を意図したという観点から説明できないのは、①塗籠本における十一章段の欠脱の理由が、編纂意識という面からは解明できないこと、②106 107 108の三段と102 103 104 105の四段の位置転換が錯簡によって生じたと考えられること、の二点である。

③の錯簡はともかく、④の欠脱章段は重大な問題ではあるが、現存塗籠本の章段配列には、定家本に比し、より強く編纂意識、類聚意識が働いている事実是否定し得ないと思う。

2 段末注記について

各章段の末尾に時に存する、実名や実名を推測させる注記的な文は、後人の竄入と早くいわれているが、この部分は両本においてどのような状態を示すであろうか。各章段の最後の歌の後に本文を有する章段は、天福本で六二章段、塗籠本で五二章段と全体のほぼ半数であるが、そのうち両本に共通な章段は、

(第一表)

計	F A+C	E A+B	D 一首添加	C 人物の 実名 注記	B 歌に 関する 解説・ 批評	A 物語の 展開 説明	内容				
							天福	塗籠			
57	2	2	1	6	16	30	本	天福			
51	0	1	2	4	15	29	本	塗籠			
	69 102	63 103	121	3 5 6 65 79 104	90 42 44 50 75 76 81 87	1 10 19 33 34 40 41	122 123	96 98 99 105 107 111 114	66 68 78 83 85 86 95	23 24 31 52 59 60 62	4 7 9 12 14 15 22
		63	9 ・ 36	3 6 65 79	93 42 50 75 78 81 87 90	1 10 19 33 34 40 41	125 105 107 114 115 122 123	98 69 83 86 96 96	68 59 59 60 62 64 66	31 52 59 60 62 64 29	4 12 14 15 23 24 29

天福本で五七章段、塗籠本で五一章段である。伊勢物語の場合、各章段は、和歌の記述で終っても、物語としての機能を果しうるし、現に半数の章段においては和歌で終っているのであるから、これらの章段最後の和歌の後に存在する本文の性格について考えてみたい。これを内容的に分類して第一表の結果を得た。なお、「とよめり」などの簡単なものも、「物語の展開・説明」の項に数えている。

この表で分るとおり、人物に関する段末注記は実際にはそれほど多くはない。天福本においては、3 5 6 65 79 104および69 102の各章段に存在し、塗籠本においては、そのうち3 6 65 79の各章段に存在する。片桐洋一氏はかかる性質の「段末注記が、塗籠本においては、6段のようにそれがなければ二条后が芥川に鬼に喰われて死んでしまったことになるから残したという特別な場合を除いては省略されている」といわれるが、果してそうであろうか。今、6段を除き、残る三章段の段末注記を対照してみよう。

天福本	塗籠本
3段 二条のきさきのまたみかたにもつかうまつりたまはてたゝ人にておはしましける時のこと也	五条后のいまた御門にもつかうまつらてたゝ人にておはしける時の事なり
65段 水のおの御時なるべし、おほみやすん所もそめとのゝ后也、五条の后とも	二条のきさきとものことばみつのをの御時事なるべしおほみやすところとはむめとのゝきさきなり
79段 これはさたかすのみこ、時の人中将の子となんいひけるあにの中納言ゆきひらのむすめのはらなり	これは貞数の親王、行平中納言のむすめのはらなり清和の親王也時人中将のことなむいひける

ところで天福本にあって塗籠本にない段末の实名注記は、5段二条后、69段斎宮、102段斎宮、104段斎宮に関する注記であり69段の如きは、展開部は塗籠本にも存しながら、人物注記の部分だけを欠くなど、たしかに塗籠本においては物語的世界の展

開と関係のない段末注記が削除されたかの感を与えられる。しかし塗籠本に存在する前掲三章段の注記も、これら塗籠本に残らない四章段の注記と全く同性質のものであり、特別に、これらの注記を残さなければならぬ理由は見出し得ないと思う。従って段末注記の有無に關しては、片桐氏のいわれるように簡単に結論づけることが妥当だと考えるわけにはいかない。むしろこれは、片桐氏のいわれるやむを得ない6段の場合を除いて、理由が明確でないので偶然という可能性も勿論あるが、斎宮と二条后に關する注記を省いたと考えるのが妥当ではないだろうか。塗籠本には、天福本にある斎宮に關する注記は三章段とも存しないし、二条后に關する注記は6段を除いて、3段の場合、天福本に「二条のきさき」とあるのを塗籠本は「五条后」となっているし、65段には「二条のきさきともこのことは一本」と校異の形で傍書されているにすぎない。

又、これらの章段最後の和歌の後に存在する本文の両本における異同を検すると、細かい異同は別として、その有無や構文上の大差がある事例は一九章段にわたり、そのうちの一章段は塗籠本にその部分が存在しない。それに対して天福本に存在しないのは五章段で、両本に存しながら表現その他が異なっているのは次の三例のみである。

①9段の最後「とよめりければ舟（塗籠本、舟人）こそりてなきにけり」のあとに塗籠本では「その河渡すぎて京にみしあひて物語してことつてやあるといひければ、みやこ人いかゝととは、やまたかみはれぬ雲井にわぶとこたゑよ」と更に展開して一首を加えている。

②69段、天福本では「とてあくればおはりのくにへこえにけり」という物語の展開部の後に「斎宮は水のおの御時文徳天皇の御むすめこれたかのみこのいもうと」という人物注記があるのを、塗籠本ではこの注記だけを欠き、斎宮の素性調べを記していない。

③78段、天福本が「となむよめりける」で終るのに対し、塗籠本では献上した石の説明が記されている。但しこの部分の文章は天福本においては歌の前に記されている。

さて、段末注記というよりも、各章段の両本共通の最後の歌の後にある本文の異同を全体的に考えてみた場合、塗籠本においてこれを除く傾向、簡略化する傾向があることが分る。共通章段において、最後の歌の後の本文をもたない章段数は、塗籠本において六章段多いし、又、定家本にのみある一章段の場合と塗籠本にのみある五章段の場合とを比較すると、塗籠本の場合一首を添加している36段以外は、「とよみてたてまつれり」（29段）「とてやみにけり」（64段）などの簡単なものだけであるのに対し、天福本の場合は、同様の事例もあるが、（7段）おおむね、「いにしへよりもあはれになむかよひける」（22段）とか「とて心にもかなしと思ひけんいか、思ひけんしらすかし」（76段）とか「のちにはたれとしりにけり」（99段）などのようなやゝ複雑な形のものが多い。これを一概に塗籠本編纂者の整理とのみ判定する根拠はなく、むしろ、そのもとになった本が、これらの本文や注記がなかったとまではいえぬにしても、少くとも斎宮や二条后に關する注記は注記として明示し、いまだ本文に混入していない形の本であったとは考えられ

ないであらうか。

3 歌の承接について

井手至氏の注目すべき論考「和歌散文連接形式の変遷」^(注6)において、氏は、歌語りから歌物語、昔物語、作り物語という順序でその和歌と散文の連接形式に相違があらわれ、ある程度発生の順を追って時代的変遷をあとづけることができる点を詳しく論証しておられる。

今、和歌の前後において両本に異同がある事例を検すると、第二表の結果を得た。

(第二表)

和歌の前	13	脱落	
和歌の後	13	添加	
	15	11	異文
	15	8	位置移動
	4	1	計
	37	33	

和歌の前の部分において、脱落(天福本に存して塗籠本にない語句)は、大半「思ひけん」「いひやる」「みて」「よめる」などの、いわばなくても和歌を提示すること自体で示されてしまうような性質の用言であるのに対し、添加(塗籠本において加わっているもの)の事例は、「思ふことなきならねはをとこ」「いひかひなくて男」など、多分に説明的要素が強く、又、男、女などの歌の詠み手、主格を明示する語句である。

和歌の後の部分は、天福本にのみ存するのは、人物の実名注記、歌の批評、解説などであるが、塗籠本において加わっているものは、主語を明確にするものその他は描写的なものである。

異文においては、塗籠本では天福本の「心やみけり」(5段)にあたる語句として「しんしける」があるが、不忍文庫本で屋代弘賢が読み写したように「志」は「ゑ」と読み、「ゑんしける」とするべきであろう。「ゑんず」は源氏物語の中にも一七例を数え、「ゑんじはつ」「ゑんじおく」「ゑんじうけぶ」などの複合語も存し、連用形の名詞用法「ゑじ」「ゑんじ」もあって、物語用語として一般的なものであるが、「信ず」となるとやゝ特殊である。源氏物語にも七例の用例をみないわけではないが、六例までが男性の会話文(うち一例は明石入道の消息文)の中にあり、残る一例も、雨夜の品定めの場合、男性世界の描写に用いられている。この5段の場合のような表現には不適であると考えられる。

塗籠本における描写的文章では、例えば、63段「むまにくらをかして……むはらからたちともしらすはしりまとひて」とか84段「となむありけるこれのみてむまにもりあえすまいるとてみちすからおもひける」などである。31段において「といふをねたむ女もありけり」という天福本の表現よりも、「ねたうをむなもおもひけり」という塗籠本の表現が、いわば物語の中にはまりこんだ姿であるように、歌の前後の表現については、塗籠本に、物語的世界に徹する態度があらわれていると思われる。

4 各種異同について

天福本と塗籠本を対校して、あらゆる異同を検出、整理する、

(第四表)

計	へし	むらし	たます	さす	すなり	きつ	めたり	たり	けり		
41			1	3	1		7	3	5	21	C 添加
40	1	1	1	3	3	1	3	3	5	2	D 脱落

④ 助動詞の添加(C)と脱落(D)
構文に異同がなく、助動詞だけが添加又は脱落する事例は、それぞれ四一例、四〇例あるが、傾向としては、塗籠本におけるリ・タリの多用をあげる事ができる。又添加の異なり語数に比し、脱落の異なり語数が多いことは塗籠本においては、天福本に比し助動詞の使用が統一であるといえよう。

(第三表)

計	接統句	代名詞	名詞	述語	副詞	修飾句	所有格句	目的格句	主格句	
70	1	8	4	21	12	5	0	10	9	A 挿入
112	4	14	7	31	19	11	5	9	12	B 脱落

⑤ 語句の挿入(A)と脱落(B)
構文に異同なく、語句が挿入されたり脱落したりしている事例は才三表のとおりである。塗籠本に脱落現象が多いが、そのために文意が不明確になっているところはなく、塗籠本における文章表現の簡素化が分る

(第五表)

ほど	など	か	や	なん	ぞ	は	も	て	ば	に	を	が	の	
4	4	0	0	1	1	12	8	6	5	12	8	3	11	E 添加
0	0	1	2	3	1	10	9	6	2	9	14	0	13	F 脱落

計	とや	をは	とは	には	にて	とて	と	まで	ながら	のみ		
81		0	0	1	1	1	0	1	0	1	2	E 添加
76		1	1	0	0	0	1	1	1	0	0	F 脱落

⑥ 助詞の添加(E)と脱落(F)
助詞においては、両本において顕著な差はないが、塗籠本において、ナド・ホド・ノミなどの副助詞の添加が目につくこと、塗籠本においてヲの脱落がやゝ多いことに注目したい。脱落している一四例のヲはすべて目的格のヲであり、文意に変化はない。

◎接頭語の添加(G)と脱落(H)および接尾語の脱落

(第六表)

	計	御	み	たち	あひ	さし	なま	うち	
ども									
0	11	2	1	0	0	1	2	5	G添加
2	5	3	0	1	1	0	0	0	H脱落

㊦代名詞の置換(J)

(第七表)

	計	いづく	いづち	われ	そのの	それ	それ	かの	この	天福本
	計	いづこ	いづこ	それ	この	そ	そこ	この	かの	塗籠本
14	1	1	1	1	1	1	1	6	2	

(I)

第六表で分るとおり、塗籠本においては、動詞に接頭語をつけて表現する形が多い。接頭語をつけることにより、意味の微妙な変化がもたらされるわけであり、表現に細かい配慮がなされていると考えてよいと思われる。

天福本におけるかのを塗籠本においては、このに置換している例がめだつて多いが、これはかとこの一字の違いであり、変体仮名においてその字体が相似しているところからも、一概に、塗籠本が物語を近称で書いているとだけは結論づけ得ず、伝写の過程における誤写を疑ってみなければならぬと思う。

◎助動詞の置換(K)

(第八表)

	計	侍	らむ	む	けむ	なり	ぬ	たり	けり	り	天福本
	計	ぬ	たらむ	らむ	む	けり	けり	にけり	ぬ	り	塗籠本
27	1	1	3	1	1	1	3	1	2	1	1

助動詞の置換は第八表の二七例である。ケリ・タリ・ヌをリ

うものが、教養度の高いものであったと考えるべきではないだろうか。

そこで、この両本における、リ・タリの実態を更に検討する。両本におけるリ・タリの上接語は第九表のとおりである。

数値が少ないので確言は避けなければならないが、リもタリも、塗籠本が総数において多いのに、上接語の一回使用語にお

者が、又は書写者の文章意識とい

ることを考えあわせると、編纂

が、上代に特徴的な助動詞である

籠本におけるリ多用は、この

伝本の一つの特徴といえる。リ

と同源と考えるべきであろうが

全体的にケリで口調をととのえて

いる伊勢物語において、その

大勢はかわらないにしても、塗

籠本におけるリ多用は、この

㊦ 動詞の置換 (M)

(第十一表)

天福本	塗籠本
く	いく・ゆく
いぬ	いく・ゆく
まうづ	まるる
おはします	おはす
す	あり
計	計
2	2
2	3
2	2
4	

のは六例であるが、逆に天福本にイク・ユクの形であられるものは二例であり、塗籠本の表現の特徴といえよう。語の形態の

構文に異同がなく、動詞のみが置換している事例は、全部で七九例あり、大半は一回のみの用例であるが、二回以上同一の置換が行なわれているのは第一一表のとおりである。塗籠本にイク・ユクの形であられるも

(第十二表)

天福本	塗籠本
複合動詞↓単一動詞	複合動詞↓単一動詞
単一動詞↓複合動詞	複合動詞の一部↔単一動詞
単一動詞↓他の単一動詞	計
計	計
17	9
11	11
42	42
79	79

面からみると第十二表のとおりである。当然のことながら単一動詞を他の単一動詞に置換する事例が多いが、半数近くが、複合動詞であるし、そのうちの半数近くが塗籠本においては単一動

詞となっている。
又これらを意義の面からみると、イク・クなど行動を表現したものが多くことがめだつので意義的に分類してみると第十三表のとおりになる。

(第十三表)

イク・マキル・ク	などの行動関係用語	20
カタラフ・アフ・イフ	などの恋愛関係用語	21
アリ・イマス・ツカフマツル	などの存在関係用語	8
その他		30
計		79

これらのうち、意味内容に変化を生ずるのは、次の三例のみである。

- ① 14段 天福本 ひなぶ ↓ ひがむ 塗籠本
- ② 62段 をとづる ↓ をとろふ
- ③ 121段 ぬる ↓ つる

これら三例は、すべて一字の異同が基になっており、別義の動詞になった当初の理由は、誤読誤写ではないかと疑う。14段は民謡調の歌を中心とした段であり、どちらの語でも意味は通じるが、なお「ひなぶ」が物語の内容から考えて適当であろう。62段はいわゆる広本系諸本が「ななかきかみをきぬのふくろにいれてとほやますりのななかきあををそきにける」という女の子を描写した異文を有する、人の国での物語で、塗籠本にも「をとろへ」という書入れがあり、文意も天福本の方が通じやすい。121段は天福本が女の返歌を記載していて、歌数に異なるある章段であるが、これも「雨につれて」と塗籠本に異本の校合が記入され、やはり当然、「雨にぬれて」であろう。意義上に変化があるとみられる三例は、すべて天福本の方が正しい本文を伝えていいると考えられる。

㊧ 語句の置換 (N)

ここには、上述までの異同では律しきれず、又異文とまではいえない異同を収めた。第十四表の如き一八〇例を得る。

(第十四表)

同義の名詞同志	40
異義の名詞同志	18
用言間の置換	23
副詞(句)関係の置換	12
感動詞の置換	1
連体詞の置換	1
接尾語の置換	2
表現の差違	39
現在表現を過去表現に	7
過去表現を現在表現に	4
文の断絶を文の連続に	11
文の連続を文の断絶に	5
その他	17
計	180

じを誰が通路と今はなるらん」であり、他の一例は、78段の藤原常行の惟喬親王へのことば「としころよそにはつかうまつれどちかくはいまだつかうまつらずこよひはこゝにさふらはん」である。(但し、この部分、塗籠本では「年来よそにはつかうまつれどまたかくはまいらすこよひはこゝにさふらはん」となっていてマダである。)そしてその他の例はすべて一二例とも(うち二例は和歌)マダである。このうちの和歌の二例は塗籠本でもマダであるが、それ以外の一〇例のうち、六例までが塗籠本ではイマダであり、残りのうち三例は、塗籠本ではマダ自体、もしくはマダを含む文自体が欠けている。従って塗籠本の中でマダが用いられているのは、53111段の歌の中を除けば、40

この異同の中で、二
三の目にたつ特徴をひ
ろい出してみよう。

塗籠本において、天
福本のマダは、六例ま
でイマダに置換され、
挿入されているイマダ
一例をあわせて、天福
本におけるよりも、七
例多いイマダを持つ。

天福本においては、イ
マダは二例であり、一
例は42段の歌「出て、
来し跡だにいまだ変ら

78段の二例だけである。40段も78段も異文、異同の多い章段で
あり、当該部分に異同がある。

天福本

塗籠本

40段人の子なればまた心いきお

ひなかりければ

と、むるいきおひなし女もい

やしければすまふ

ちからなしさるあひたにおも

ひはいやまさりにまさる

人のこなれば心のいきほひなくて

ゑと、めすをんなもいやしければ

すまう

ちからなしこそいゑまたゑやら

すなるあひたに思

はいやまさりにまさる

この二文を比較してみると、塗籠本の文は説明的にすぎてお
ちつかない。78段の異同は前述のとおりであるが、これも天福
本の「ちかくはいまだつかうまつらず」の方がそれにひかれて
生じた異文とおもわれる「またかくはまいらず」よりは文章が
ととのっている。すなわち、塗籠本におけるマダはぶれが大き
い、正当な塗籠本本文であるかを疑わせられるような部分にあ
るのであるから、大勢は、「塗籠本においてはマダにかわって
イマダが使用されている。」と考えてよいと思われる。

ところで、マダはイマダの略と考えられており、古く日本書
紀の古訓から「末」合時・末太不支安八世左留止支仁」(神代
紀下、私記乙本)「末」及之死、末太之奈奴尔」(景行紀二十
七年、私記丙本)の例がみえるといわれているし、一般に和文
の物語類、日記類にはイマダを用いることは少なく主としてマ
ダがあらわれるのが常である。今、第十五表にそれを表示して
みる。

万葉集	0	まだ
竹取物語	2	いまだ
大和物語	8	
源氏物語	230	
落窪物語	29	
浜松中納言物語	10	
蜻蛉日記	30	
和泉式部日記	8	
紫式部日記	10	
更級日記	7	
古今集	2	
後撰集	20	
枕草子	39	
徒然草	0	
方丈記	0	
	1	
	10	
	1	
	1	
	3	
	2	
	1	
	0	
	1	
	3	
	2	
	3	
	0	
	3	
	58	

系の女子の物語世界には用いられなかったといえよう。その点から考えて、このことは塗籠本の成立にはイマダという用語に慣れている男性が深くかかわっているといえる一つの証左であると思われる。

又、この語句の置換という項目でとりあげた異同の中で、文の断続という面をながめてみると、天福本においては文が終止しているところを、塗籠本では続けている事例が一一例あって反対の場合の五例に比し多いが、一体に、塗籠本は文が連綿と続く傾向があつて、伊勢物語の短文構成という文体的特徴をや

源氏物語の三例のイマダのうち、二例は、冷泉院および僧侶のことはであり、残る一例は、薰大将の行動を示す語に用いられているが、この例は河内本ではマダになっている。

又、枕草子の一例のイマダは、宰相の中將が誦する詩句である。

この用例分布からみて、イマダは、①古く万葉集に用いられる歌語であり、②男子の世界に生きのび、③和文

や遠ざかる感じがする。関連して、語彙は同じであっても活用形が異なる事例をあげてみると、天福本が連体形であるところを塗籠本が終止形にしているものが一四例あり、その逆は二例しかない。天福本が終止形になっている二例は、その天福本の方の形が文法的にみて正しいが、逆の場合の一四例は、まさに正否半々であつて、文法意識に基づくものではなく、一種の慣用的な口調として、塗籠本では文を終止形でとどめるよりも、文を続けてゆく態度をもっているといえよう。

この点を更に明確にするために、両本に共通する章段の文の断続について検すると、異同が第十六表(次頁)の如く三五例みられるうち、塗籠本の方が文を続けている事例が逆の場合の二倍をしめている。

かくして、天福本に比し、塗籠本においては、文を長く続ける傾向が強いことが判明した。

このように語句の置換のあり方から、塗籠本における文章表現の特徴が導びき出されてくるが、なおこれらの異同の大半が、一字の違い、又は同字数かせいぜい一字の出入りの範囲で起っており、又かな文字の同一の続き方(例えばちかくとかく)で起っていることを考えると、異同が生じる原因の大半は誤写誤読にあるということを示唆していると思われる。

(第十六表)

型	用例数	用例をもつ章段	実例
天福本 塗。の。の。 天。の。の。 復合形	10	63 6 69 43 69 45 82 45 83 58	63段
天福本 塗。の。の。 天。の。の。 復合形	21	82 65 31 12 82 65 37 12 83 68 45 19 83 81 49 21 96 81 63 23	12段
天福本 塗。の。の。 天。の。の。 復合形	4	42 69 78 96	78段
天福本			天福本
塗籠本			塗籠本

②異文(〇)
以上の異同の他に、以上のすべての事例よりもなお大巾に異なる異文八二例を得ている。これらの異文については一覽表を

提示し、一例一例について各個に検討するより他ないのであるが、いたずらに紙幅をとることをおそれて、いまは、①塗籠本の方に挿入異文が多いこと。(例えば23段。天福本「いまはう

ちとけてつから」塗籠本「いまはうちとけてかみをかしらに
まきあけておもながやかなるをむなのてつから」②塗籠本の
方に本文の乱れと思われる文のだぶつきがあること。(例えば
1段。天福本「いひやりける」塗籠本「やりりけるをなんいひ
つきてやりりける」)③塗籠本の方に説明的な異文が多いこと。
(例えば6段。天福本「からうしてぬすみてゝいとくらきに
きけり」塗籠本「からうしてをんなのこゝろあはせてぬすみて
にけり」)などの特徴的な傾向がみられることをあげておく
にとどめる。これらの異文の混入の過程については、他系統の
伝本との校合を通さなければ何もいい得ないであろう。

④その他(P)

その他の異同としては、固有名詞の異同、一三例。(例えば
3段。天福本「二条のきさき」塗籠本「五条后」)語句の位置
転換、一三例。(例えば4段。天福本「心さしふかゝりけるひ
とゆきとふらひけるを」塗籠本「ゆきとふらふ人こゝろさしふ
かゝりけるを」)その他、全く意味不明の異同、一六例があった。
(例えば85段。天福本「おほみき」塗籠本「おほにふき」。こ
れらは明らかに誤写と考えてよいであろう。)又、音便形の相
違、および仮名遣の相違には今回は触れなかった。又、和歌に
ついては、地の文の伝承とはまた異なる意識があったと考えら
れ、事実、和歌の異同は、地の文の異同に比しきわめて少ない。
和歌の異同は、一五三例を数えたが、これについても今回は言
及しなかった。別の観点からの検討が必要であると判断したか
らである。

以上、検討してきた両本の各種の異同は、地の文のみで一〇

(第十七表)

				異同箇所	章段数	該当章段
26 以上	16 }	6 }	5 以下			
	25	15		11	8	30
						65
	6	1	16			
	9	63	21			
	65	69	23			
	69	78	40			
	78	82	41			
	82	83	81			
	83	87	85			
	87	96				
	96	107				

又これらの異同は、両本の共有章段にほぼ均等に分布してい
て、従って一般に長大な章段には多く、短小な章段には少な
い。すなわちある特定の章段や、章段群において特にきわだつ
て異同が多いとか少ないとかいう現象はみられない。

三四箇所であった。これらの異同が各章段にどのように分布し
ているかをみると、一章段内に三〇箇所以上の異同を有する章
段は、69 65 69 78 87 96 段の七章段であり、その反面、全く異同
のない章段も二章段のみであるが、106 113 段があった。異同の多
寡によって章段の性質が決定できるものではないが、おおよそ
の判定は可能であろう。異同の多い章段がその成立、伝写の過
程において何らかの形で複雑な要素を持つことは否定できない。
第十七表に、この異同箇所を表示してみよう。両本に共通する
一一四章段の中で、異同の多い章段は比較的少ないことが分る。

以上で、天福本と塗籠本の異同を一一おし検しおえたが、ここにあらわれた様々な事象が指向していることは、塗籠本が持っている複雑な性格であると思われる。

塗籠本は、天福本に比して、語句や助動詞などを脱落する傾向が、つよく文を簡素化単純化していながら、反面きわめて説明的描写的である。文章表現に統一的な意識がうかがえ、助詞や助動詞の使用も天福本に比して異なり語数が少ないが、接頭語の添加、副助詞の添加など微妙な表現意識を働かせているあとがみられる。又、文は接続助詞などを用いて長く続ける長文化の傾向がみられ、伊勢物語的な文体からや、離れて連綿文体への傾斜の傾向を認めざるを得ないのであるが、一方、語り口は物語的世界に徹しているところが多く、和歌の提示で終る章段が多いなど、本来的な歌物語の姿を伝えていると考えられる部分も少なくない。イマダという男子の世界に一般である副詞をもっぱら使用するなど、語句の使用法などから考えて、教養高く、文芸意識の強い男性が、全体的な見地からかなり強力な編纂の手を加えたと考えられ、塗籠本の章段序は、その編纂意識、類聚意識をよくあらわしている。天福本との異同は、塗籠本の全体にわたってほとんど均等に生じており、そのことから考えて、片桐洋一氏が文献学的に考証された数次の成長をとげたあとの、すなわち現存本の形に近いところまで成長し終ったものに對して、前述したような男性編者の手が加わったと考えられる。けれども、いわゆる段末注記の欠脱の仕方などから、少くともある種の注記が本文に混入する以前の古い本をもとにして編纂を行なっているとも疑われる。

かくして、異同の実態を眺めてみると、塗籠本本文が様々な相矛盾した面をあわせ持っているというその複雑さが露呈されてきて、前述した以上にはその成立に関しての推論を行ない得ない。塗籠本にみられるかゝる複雑な言語相がいかにして生じ、何を意味するかを解明することが次の問題になると考えられる。

注

- 1、南波浩「新資料民部卿局筆塗籠本伊勢物語について」国語国文28巻・11号所載。朝日新聞社刊日本古典全書「伊勢物語」の解説239ページ所載。
- 2、これらの諸点について、片桐洋一氏「伊勢物語の研究」に卓論がある。④242ページ③383ページ④386ページ⑤243ページ⑥205ページ⑦243ページ⑧254ページ。所載。氏の場合は、編纂意識という面からのみの立論ではないが、同趣の記述になる場合が多いので、これらの諸点が、塗籠本においてどのように類纂的であるかという点については本稿では述べなかつた。
- 3、前掲書389ページ所載。
- 4、57922936446469767899102103104111115121125の各段
- 5、293664115125の各段
- 6、文学史研究、5号所載
- 7、大津有一「伊勢物語に就きての研究」補遺篇287ページに論がある。
- 8、この点に関しては片桐洋一氏の前掲書388ページ389ページに述べられている論と結論的に一致している。